



妻地団  
美繁の  
尻巨を  
見覗き

ルンルン

団地妻繁美の  
巨尻を覗き見

著者：ルンルン

## 1. 密かな愉しみ

古びた市営団地の夜は、驚くほど生々しい。

駅から続く街灯の乏しい帰路を歩き、巨大なコンクリートの墓標のような棟の間へ足を踏み入れると、空気は一変して重く、湿ったものになる。

一歩進むごとに、安普請な壁を突き抜けてくる「生活」の残骸が俺の鼻腔を突いた。

換気扇から吐き出される油臭い夕飯の匂い、湿った洗濯物の生乾き臭、そして——どこからか漏れ聞こえる、押し殺したような女の喘ぎ声だ。

それは、テレビの笑い声や子供の泣き声といった「健全な日常」に紛れ込みながらも、確実に男の充足を促すように、暗がりじつとりと溶け出している。

見上げれば、4号棟の3階のベランダには、無防備にも真っ白な綿のパンティが、夜風に力なく揺れていた。

生活し尽くされ、何度も洗濯されたせいで少し毛羽立ち、生地が薄くなったそれは、男の欲望を誘うような華美なレースなど一つもない。

だが、その「飾り気のなさ」こそが、この団地に住む女の剥き出しの肉体を連想させ、嫌というほど俺の妄想を掻き立てる。

向かい合わせに建つ4号棟と5号棟の距離は、互いの恥部を隠すにはあまりにも近すぎた。

カーテンの閉め忘れ。隙間から漏れるオレンジ色の電球。

その光に照らされるのは、慎ましい暮らしの裏側で、夫の目を盗み、あるいは孤独に耐えかねて、自身の柔らかな肉を弄る女たちの秘め事だ。

錆びついた鉄扉を閉める重い音、水の流れる配管の唸り。

そんな無機質な音の合間に、誰にも知られず溢れ出した\*\*「女の蜜」の匂い\*\*が漂っている。

俺はこの巨大な檻の中に、情欲に飢えた獲物が潜んでいることを知っている。

そして今夜も、そのカーテンの隙間に張り付き、慎ましさを装った女が自らの「メス」を解放する瞬間を、じっと待つのだ。

そして今の俺の密かな愉しみは、向かいに住む繁美が居間で服を脱いで風呂場へ向かう姿を覗くことだった。

彼女は 30 代前半。

旦那は工場勤めなのか、週の半分以上は夜勤で家を空けている。

その「男の不在」が、彼女の住む部屋全体にどこか弛緩した、湿り気のある空気を漂わせていた。

彼女は近所のコンビニで深夜までのアルバイトをしていた。

俺もたまに客として訪れるが、レジ袋に品物を詰める際、彼女が少し前屈みになるたびに、制服のタイトなズボンを内側から破らんばかりに押し上げる大きな尻が、どうしても気になって仕方がなかった。

家事とバイトに追われているせいだろう、彼女の所作には「女」としての気負いがまるでない。

家事の合間なのだろう、スウェットの裾からは、上半身の華奢さからは想像もつかないほど肉感的な大きな尻が惜しげもなく覗いている。

一步、足を前に踏み出すたびに、その重厚な曲線が重力に逆らえず、「フルフル」と波打つように、野卑な震えを見せる。

薄いスウェットの生地越しでも、その尻の柔らかさと、指を沈めればどこまでも埋まってしまいそうな弾力が克明に伝わってきた。

「あのケツに 1 発入れてえなあ」と俺はいつも思って見ていた。

対照的に、首元から覗く鎖骨は細く、A カップの慎ましい胸は、その大きな尻の存在感をよりいっそう、暴力的なまでに際立たせている。

その極端なアンバランスさ。

守ってやりたくなるような「清廉な上半身」と、男を飲み込み、孕むためだけに存在するかのような「野卑な下半身」。

その矛盾した肢体が、俺の奥底に眠る獣のような本能を、これ以上ないほど激しく逆なでするのだ。

## 2. カーテン越しの視線

いつものように俺は自室の明かりを消し、カーテンの隙間から向かいの部屋をじっと見つめる。

そこには、いつものスウェットに身を包んだ繁美がいた。

彼女は鼻歌混じりに、無造作な手つきでスウェットの裾に手をかける。

ずると布地を床に落とすと、上半身の華奢な印象とは裏腹な、あの重厚感のある尻が露わになった。

太腿に食い込むほど豊かで大きな曲線。

スウェットを脱ぎ捨てた彼女は、まだこちらに気づいていない。

そのまま、彼女は自身の大きな尻を揉みほぐすように、ゆっくりと両手で掴んだ。指先が白く肉厚な肌に沈み込み、掴み上げられた肉が指の間から「ムにり」と溢れ出す。

コンビニのレジで丁寧な接客をしていた彼女が、家ではこれほどまでに野卑な肉体を晒し、無防備に自身の「女」を弄んでいる。

彼女は少しだけ腰を反らせ、鏡を見るように自分の尻の状態を確認しているようだった。

揺れるたびにそのふたつの豊かな岡が「プルン、プルン」と震え、薄い陰毛に覆われた秘部が、重なり合う肉の隙間からチラチラと見え隠れする。

俺は、カーテンを掴む指先に力が入るのを止められなかった。

暗闇の中で、俺の荒い呼吸だけが自室に響く。

もっと近くで、その尻の揺れを見たい。

しっとりとした陰部に指を沈めた時の、その圧倒的な質感をこの手で確かめたかった。

繁美は、最後に自身の A カップの慎ましい胸を愛おしそうになぞると深く吐息をついた。

その吐息が、こちらの窓まで届きそうな錯覚に陥る。

俺の心臓は、警報のように激しく脈打っていた。

そして、運命の瞬間が訪れる。

彼女が風呂場へ向かおうと、ふと、窓の外……つまり、俺が潜んでいる闇の方へ視線を向けたのだ。

逃げる間もなかった。

まさにその瞬間、タイミング悪く俺の部屋のセンサーライトがカチリと音を立てて点灯したのだ。

暗闇という唯一の防壁を剥ぎ取られ、カーテンの隙間に張り付いた俺の顔が、向かいの彼女の瞳に鮮明に映し出される。

逃げなきゃいけない。

なのに、あまりの至近距離に俺は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなる。

女は普通なら悲鳴を上げるか、カーテンを閉めるはずだ。

だが、繁美も「え？」と小さく唇を動かただけで、全裸のまま呆然と立ち尽くしていた。

電灯に照らされた俺の「卑猥な眼差し」に全身を射抜かれ、彼女の白い肌がみるみるうちに耳の裏まで朱に染まっていくのが手に取るようにわかる。

けれど、彼女は叫び声を上げることも、慌ててカーテンを閉めることもしなかった。

ただ、その大きな尻をプルプルと震わせ、羞恥に顔を歪めながらも、俺の視線から逃げられないかのようにじっと見つめ返してくる。

慌ててカーテンを閉め、部屋の隅で荒い息を吐きながら、俺は自分の愚かさと、それ以上に昂ぶった自身の肉棒に戦慄していた。

「見られた……確かに、俺のあの顔を見られた」

恐怖で震えているはずなのに、脳裏に焼き付いているのは、光に射抜かれた瞬間の繁美さんの、あのトロんと潤んだ瞳と、羞恥で赤く染まった大きな尻の残像だ。

真っ暗な自室で、俺はたまらずジャージの中に手を滑り込ませた。

握りしめた硬い感触が、彼女のあの尻を搔き分けた間に割り込み、白濁した液体をぶちまける妄想を加速させる。

「悲鳴を上げなかったのは、なぜだ？ なぜ、全裸のまま俺を見つめ返した？」

拒絶されなかったという事実が、楽観的な観測と大きな疑問として残った。

もしかしたら彼女もまた、この団地の閉塞感の中で、誰かに覗かれ、汚されることを望んでいるのではないか。

そんな都合のいい妄想が、暗闇の中でドロドロとした確信に変わっていく。

翌日、重い足取りで彼女の部屋のインターホンを鳴らすと、扉の向こうから現れた繁美は、昨夜の出来事などなかったかのような、あまりに無防備な姿だった。

無造作に高い位置でまとめられた髪からは、数本の毛束がうなじにだらしなく垂れ下がり、首元の伸びたTシャツは洗濯し尽くされたせいで生地が薄くなっている。

「昨日は……その、本当にすみませんでした……」

消え入るような声で謝罪し、合わせる顔がないと俯く俺に対し、繁美はトロンとした瞳で首を傾げた。

「ああ、昨日の……。ふふ、見えてました？ 古い団地ですからね、お互い様っていうか、仕方ないですよねぇ……」

彼女は困ったように微笑みながら、無自覚に自らの身体をさすった。

その拍子に、Tシャツの広い襟ぐりが大きく傾き、ブラジャーを着けていないAカップの控えめな胸が、白く滑らかな起伏を覗かせる。

布地越しでもはっきりとわかる、外気に晒されて硬く尖った先端の突起。

さらに、彼女が軽く身を乗り出すたびに、スウェットに包まれた大きな尻が、その適度な重みをゆったりと揺らした。

昨夜、暗闇の中で見たあの「淫らな姿」が、今この明るい陽光の下で、手の届く距離に存在していた。

「仕方ない」と笑いながらも、彼女の頬はどこか火照ったように赤らみ、潤んだ瞳は俺の視線を避けることなく、どこか誘うように揺れている。

守べき境界線を自ら踏み越えてくるような危機感のなさ。

「この女なら、何をしても許してくれるのではないか」

そんな暗い確信が胸を掠めた瞬間、俺の中で張り詰めていた何かが、音を立てて粉々に崩れ去った。



---

団地妻繁美の巨尻を覗き見

著者・制作：ルンルン

発行：2026 年 5 月

---